

日時： 2012年3月7日（水）13：30 - 15：00

会場： 京都大学大学院教育学研究科 第1会議室

【講演者】

綾屋 紗月 先生（東京大学先端科学技術研究センター）

熊谷 晋一郎 先生（東京大学先端科学技術研究センター）

【演題】「当事者研究の可能性 ～社会適応を再考する～」

【熊谷講演 要旨】

一般に障害とは、ある身体特性を標準とみなす社会において、「標準から外れた身体特性」の持ち主が、「活動レベルの困難」や、「社会参加における障壁」を経験する事態を表す。したがって障害は個人の特性に還元されるものではなく、個人特性と社会のありようとの「間」に生じるものである。このように障害をとらえると、それを改善するためには、障害者本人の身体特性を標準に近づけるか、逆に本人の特性に対応する形で社会のありようを変化させるかの二つの方向が構想しうる。

本講演では一点目として、時代の流れとともに、問題視される身体特性が変化してきた様子を、「近代化と依存症」「フォーディズムと脳性まひ」「ポストフォーディズムと自閉症スペクトラム」の3つを例に概観する。そして、人々に要請される能力基準も時代によって変化しつつあることを、「キーコンピテンシー」という概念を紹介することで指摘する。

【綾屋講演 要旨】

自閉症当事者からの報告が重なるにつれて分かってきたことは、当事者にとっての問題の大半は、対人関係以前の、知覚・運動のレベルにあることであった。しかし、知覚・運動レベルの問題は、自閉症に特異的な特性であるとされながらも、その診断学的位置づけが明確にされず、本格的な研究も少なかった。これらの問題を明らかにするためには、対人関係が本格的に生じる前の胎児期・乳児期の知覚運動様相についてのコホート調査のみならず、当事者による内部観測的な視点も不可欠である。

そこで二点目として本講演では、綾屋の提案する、対人関係と知覚・運動レベルの症状を統一的に説明する「情報のまとめあげ困難説」を紹介する。これは、「身体の内外から入力し続けている断片的な知覚情報を、時空間的に統合された全体パターンへとまとめあげることや、自分のなした運動指令とそれに随伴する知覚フィードバックとの間に生じる随伴パターンをまとめあげることが困難である」というものである。その二次的な結果として、「ある条件下で」対人関係上の困難が生じうることを詳しく説明する。さらに綾屋の体験と、他の仲間との取り組みを通して、当事者にとっての当事者研究の意義について述べる。